

# 恒存の「文化について」(参照、以下三頁)

\* 恒存評論から、それを纏めて端的に言ふと、

\* 「現代の日本には主體的な生き方や心の働きとしての文化や教養がないばかりか、文化とはそのやうな主體的な精神の型(E)だといふ觀念さへないのです。おそらく日本の全歴史を通じて現代ほど文化が薄ぺらになり、教養ある階級を失つた時代はなかつたらう。(中略)私たちはまづその自覺に徹すべき」(全五P187『傳統にたいする心構』)

文化とは禮儀作法等の有機的様式(Eの至大化)が、生活の中に存在してゐる事を言ふ(「文化財Fは文化の一部」:P210『文化とはなにか』)。

\* 「文化(D1)とは私たちの生き方(E)であります。生活の様式(E)であります」(全五P185『傳統にたいする心構』の「エリオットの弁」より)。

\* 「文化(D1)があり、傳統があるところでは、社會が、家庭(即ち仕來り)が、それ(生き方E)を教へてくれる」。⇒(現代はそれ(生き方・様式:E)が無くなつて來てゐて、文化も希薄・喪失化)。

即ち文化(D1)のある處(換言すれば自國の歴史との「適應正常化＝非沈湎」が圖れてゐる國)では、「E」を至大化させる「型・仕來り・禮儀作法・様式・儀式」が形成されてゐて、その「型・仕來り」が歴史との關係(文化)を、形ある「物」として生き方に反映(Eを至大化)させてくれるのである。文化(D1)のある國は「仕來り(Eの至大化)」を持つが故に、「對象・言葉との距離測定不能(言葉に呪縛)」が原因の、適應異常や狂氣の回避が可能となるのである。

\* 「生き方」とは、「物(F:言葉)を生き物として附合ふ事(即ちEの至大化)である」(『人間國寶』序より)。そして、現代は是(生き物として附合ふ事＝物を愛し作る職人＝自分の生き方が日本の文化だと愛し自信を持つてゐる人＝型＝Eの至大化)が喪失或いは希薄化されてゐるのである。

\* 「文化(D1)の根柢は言葉(Fそして言葉の型である「E＝正統表記＝正假名正漢字」)にある事に氣附いてゐる人が餘りにも少ない。なぜにさうなつたかと言へば、戦後の國語國字改悪が徹底した結果、言葉(F)が文化(D1)を支へ、思考力や道徳や人格(いづれもEの至大化)を支へ、その崩壊を食ひ止め得る唯一の財産だといふ自覺の切掛けすら持たぬ人達が多くなつたからである。」(『新漢語の問題』全七P461)

\* 今日「有機體としての統一を保つた文化」が希薄(『文化とはなにか』全三P210)⇒参照圖(有機體、統一體としての圖「日本の文化形態」)。

P223「自分の氣質とかくせとかいふものは大事なものであります。それは私たちの、いはば生きかた(E)であつて、それを變へろといはれるのは自分の生活が否定されるほどに辛いのです」⇒「さういふ辛い目(生きかた:E=「氣質・くせ:E」を變へろ)にばかりあつてきた。(中略)文化の混亂であり、文化の喪失であります」(『文化とはなにか』全三P223)⇒「近代化の實績を擧げた」犠牲として「日本人固有の文化」の喪失が支払われた。(『教育改革に關し首相に訴ふ』) \* P223「自己を肯定(保守)し、自己を守る(保守)ための文化がないところに、私たちは生きる楽しみ(充實感・實在感:D3)を享受することはできないのであります」。即ち「D1(文化)⇒保守⇒實在感・充實感D3」と言ふ事である。

【型の喪失化＝文化の希薄・喪失化】

①関係(文化)と稱する實在物は潜在的には言葉・物によつて表し得る。故に言葉・物との附合ひ方、扱ひ方。即ち「フレイジング」「So called」「型・仕來り・生き方・様式」の用ゐ方の適不適で、場との關係(D1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反對に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。⇒つまり文化とは、「言葉・物を生き物として附合ふ」事(Eの至大化)を可能にしてくれる、「生き方」「型」の所有を意味する。⇒故に、「型・E」の喪失は、「言葉(物)を精神化し、支配、操作する事を」出来なくさせる事(Eの至小化)に繋がる。⇒その爲に、文化の希薄化・喪失化を招く(Eの至小化＝D1の至小化)。

F: 物・言葉・戦後日本は、文化財・國語としてはあるが、型を喪失してゐるが故に、それらは有機體ではなく、死物化してゐる状態。⇒文化喪失・希薄。(文化財は文化の一部:P210「文化とはなにか」)

文化とは「生き方」、即ち、物＝文化財(F)そのものにあるのではなく、それを形ある「物」にあらしめる、型、言ひ換へれば「仕來り(躰)・風習・様式・儀式・祭祀・傳統技術:E」にあると言ふ事。

C: 歴史・自然

D1: 文化

E: 型・儀式

\* 日本は「型・儀式」なるものを喪失して、「自分と言葉との距離の測定が出来」なくなり、結果として人は言葉(觀念)や物の中に呑み込まれ、対象を的確に捉へる術を喪つてしまつた。

\* 恒存は、「型にしたがつた行動」即ち「型・儀式」なるものを、「自分と言葉との距離の測定が出来」「言葉を自己所有化する事が出来る」働き(＝Eの至大化)を持つものと捉へるが故に、それを更に敷衍して、「型・儀式」は「物を生き物として附合ふ」事を可能にしてくれる手立てになると捉へてゐる。そして、「so called＝所謂何々」や「フレイジング(句節法: 演劇用語)」について書いてゐる文章ではかうも言つてゐる。「so called」「フレイジング」(型も然り)を用ゐる事は、人間の意識度を高くさせ、言葉の用法に細心の注意を仕向けさせ、その結果「言葉を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉(物)を精神化し、支配、操作する事が出来る」様になると。(参照:『醒めて踊れ』P391全七)

川上會員FAX文:補足「大事な事は物(F言葉:○圖))を生き物として附合ふ事である」(『人間國寶』序』より)  
「物(左圖)」と「生き物として附合ふ(右圖)」との違い。

重要なのは、それが出来る爲には次の内容が必要となると言ふ事。…せりふの力學、換言すればせりふ(言葉・物)との附合ひ方、扱ひ方。即ち「フレイジング」「So called」「型・仕來り・生き方・様式」の用ゐ方の適不適で、場との關係(D1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反對に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。

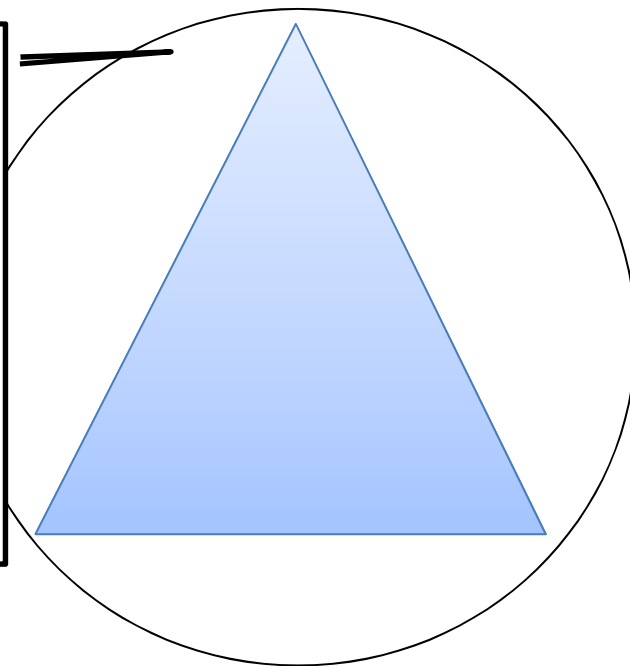
\* 以下圖は人間(△圖)が物(F・言葉・○圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

\* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」

\* 下圖は、「物(F・○圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化＝自分と言葉(物)との距離の測定」が出来てゐる状態。

\* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

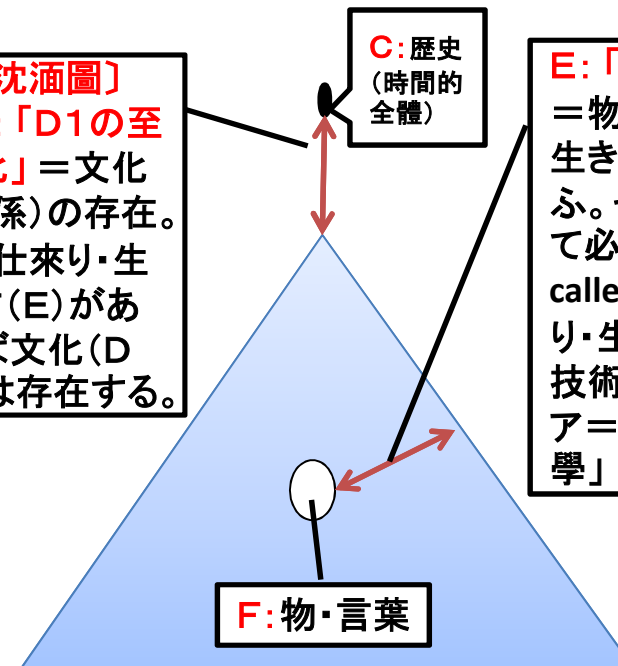
〔沈湎圖〕  
D1の喪失  
はEの喪失。即ち文化の喪失＝型の喪失＝物・言葉との附合ひ方の喪失…  
「野蠻」  
⇔文明

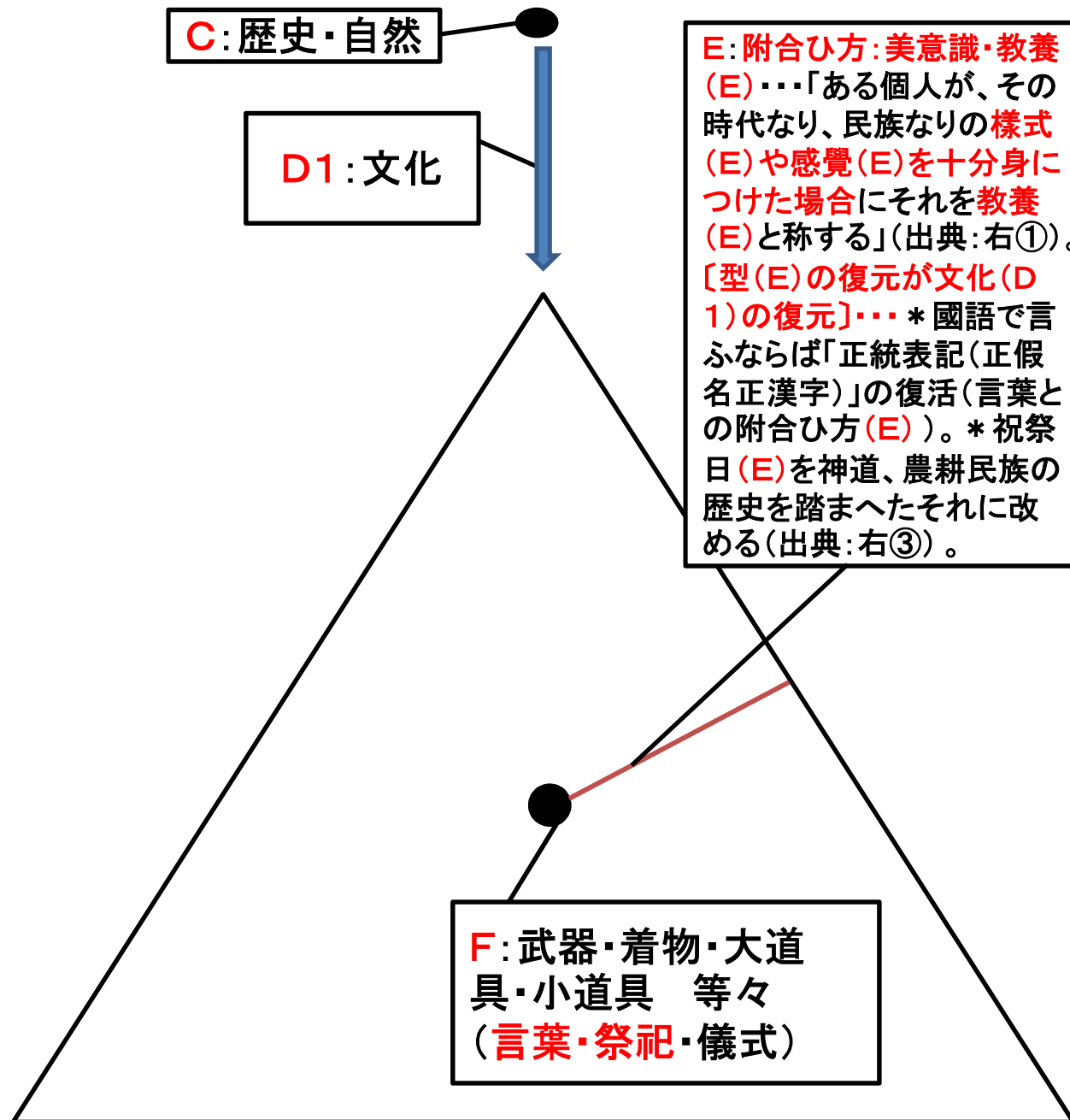


〔非沈湎圖〕  
D1: 「D1の至大化」＝文化(關係)の存在。型・仕來り・生き方(E)があれば文化(D1)は存在する。

C: 歴史  
(時間的全體)

E: 「Eの至大化」  
＝物・言葉(F)を生き物として附合ふ。その手段として必要な「So called」「型・仕來り・生き方・様式・技術」「ソフトウェア＝精神の政治學」





\*「一時代、一民族の生き方が一つの型 (E) に結集する處に一つの文化 (D1) が生れる。その同じ物が個人に現れる時、人はそれを教養と稱する」(全四P393『文學以前』)

\*「現代の日本には主體的な生き方 (Eの至大化) や心の働きとしての文化や教養がないばかりか、文化とはそのやうな主體的な精神の型 (E=「主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動」全三P204『日本および日本人』) だといふ觀念さへないのです。おそらく日本の全歴史を通じて現代ほど文化が薄ぺらになり、教養ある階級を失つた時代はなかつたらう。(中略) 私たちはまづその自覺に徹すべき」(全五P187『傳統にたいする心構』)

⇒「型の復元による文化の復元」

#### 出典

①P93:『人間の生き方、ものの考へ方』。

②P62:『日本への遺言』

③『傳統技術保護に關し首相に訴ふ』レジュメ